

# 古代寺院の全体像残す

市内で唯一国史跡に指定されている正家廃寺跡は、伽藍（寺の建築物）配置や構造物の遺構（建物などの跡）、多くの出土品などから奈良時代に建てられた寺院跡で、付属施設まで含めた全体が良好な状態で残っています。この貴重な遺跡を保存活用するため、昨年5月に、正家廃寺跡の歴史的・文化的価値を明確にして適切な保存管理と整備活用の基本的な方針を定めた「史跡正家廃寺跡保存管理計画」を策定。ことしの9月には、指定地の公有化が完了しました。本年度から平成28年度まで、現地の追加調査を行いながら整備計画を策定し、これに基づいて整備を進めていきます。

□問い合わせ 文化課 43-2112（内線320）

## 15年ぶり発掘調査を再開

### 寺の正面の様子を把握

市では、ことし15年ぶりに正家廃寺跡の調査を再開しました。整備計画を考えるには、史跡の全体像を把握する必要があります。過去の調査は、塔や金堂のある伽藍地を中心に行っていて、それ以外は不明な点が多く残っています。そこで史跡整備の資料を収集するため、5年計画で次の3点を調査します。①伽藍地の正面（南側）の遺構の確認

とその性格の把握。②伽藍地東側の区画の性格の把握。③伽藍地西辺築地（土を固めて造った塀）外側の遺構の確認。4カ年現地を調査し、最終年度に報告書を作成します。これらの調査で、①寺の正面がどのような景観だったのか、②僧侶らがどのような生活を、寺ではどのようなことをしていたのか、③伽藍地西側に一つだけ発見された礎石（建物の土台として置く石）があるが、西側にも大きな建物があったか

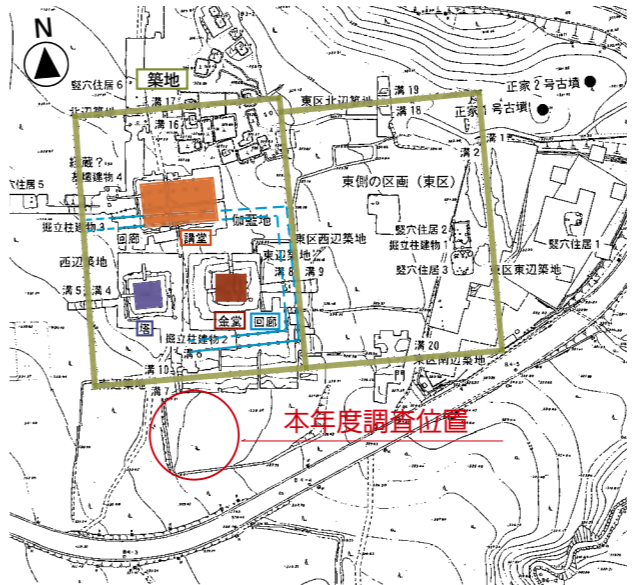
どうかの把握が期待できます。本年度は、このうち①を目的として、9月から、伽藍地中門推定地の南側162.5平方メートルで、発掘調査を行いました。古代寺院の伽藍地には、人が立ち入ることができません。一般の礼拝や儀式は、正面の広場で行われ、集落や街道から寺院へ行く参道は、寺院正面に向かっていました。正家廃寺跡も、寺院正面には比較的広い平坦地があり、広場の存在が想定されます。集落は、廃寺跡の北側（後ろ）にあり、集落から丘陵の南側に回り込んで伽藍地の正面へ行く参道があったと予想されます。

どうかの把握が期待できます。本年度は、このうち①を目的として、9月から、伽藍地中門推定地の南側162.5平方メートルで、発掘調査を行いました。古代寺院の伽藍地には、人が立ち入ることができません。一般の礼拝や儀式は、正面の広場で行われ、集落や街道から寺院へ行く参道は、寺院正面に向かっていました。正家廃寺跡も、寺院正面には比較的広い平坦地があり、広場の存在が想定されます。集落は、廃寺跡の北側（後ろ）にあり、集落から丘陵の南側に回り込んで伽藍地の正面へ行く参道があったと予想されます。

▼丘陵地に残る正家廃寺跡(中央)



▼本年度の調査位置



▲市文化財保護審議会委員に現場を公開し中間報告(10月28日)

### 広場の可能性が高まる

正家廃寺跡周辺は、西南から北東に向かって緩やかに傾斜しています。過去に畑として利用されてきました。調査の結果、畑になる前に整地されている可能性が高いことが判明。整地された時期は不明ですが、整地された面からは、建物など構造物の跡は見つかっていません。調査地点周辺は、寺院が存在したころには広場だった可能性が高まりました。今回、参道の位置は確認できませんでした。

この場所を寺院の広場と評価するには、例えば南門や幢竿支柱（祭事の登り旗を建てるための支柱）のような遺構を見つかったり、参道を確認

したりすることが必要です。今後の調査では、全域を発掘することは困難なため、詳細な地形測量による微地形の分析などで丘陵下からの道を推定していきます。



▲本年度、伽藍地の正面(南側)を発掘調査

### 初年度大きな成果あり

文化庁文化財部記念物課史跡部門  
さとうまさとも  
佐藤正知 主任文化財調査官



今回の調査では、顕著な遺構が見つかりませんが、逆にその意味は大きいです。通常、寺の前には何も無い神聖な空間があります。調査の結果、何も無いことが分かれば、寺の南側に神聖な空間があったことを示します。初年度の調査は、大きな成果があったと言えます。ここは東に向かって谷が開けていて、東側から寺を望む地形です。普段は東側から寺へ出入りし、儀式のようなときは南側の参道を利用した可能性があるとされます。今後は、東側と南側の経路の関係を調べる必要があります。



▼上段は風鐸。中段は風招。下段は鉄製円盤



▲法隆寺の五重塔より一回り小さいと想像される塔の跡

**塔の推定高さは約30** 塔の規模は一辺6の正方形で、心柱は直径72と判明。これから推定される塔の高さは約30で、五重塔も可能な高さです。周辺からは、塔のつべんの相輪を飾ったと思われる高さ10ほどの小型の風鐸が風招とともに出土。全国でも20例ほどしか発見されていない珍しい遺物で、金銅製が1点と鉄製が2点あります。また直径6・5で、用途不明の鉄製円盤が4点出土しています。

塔の推定高さは約30

国指定史跡 正家廃寺跡  
本格的な寺院良好に保存

正家廃寺跡は、市街地の南端で市街地を一望できる河岸段丘（河川に沿う階段状の地形）に位置する寺院跡です。奈良時代の8世紀前半に建設が始まり、9世紀後半に主要伽藍の火災を契機に廃絶しました。寺院には、築地で囲まれた二つの区画があり東西約110、南北約70の寺域。主要伽藍を法隆寺式に配置する本格的な古代寺院でした。塔や金堂、講堂の基壇（建物の基礎部分に築いた石や土の壇）は乱石積みで、上面の礎石の保存状態は比較的良好です。瓦は、まったく出土せず屋根は瓦ぶきではありませんでした。



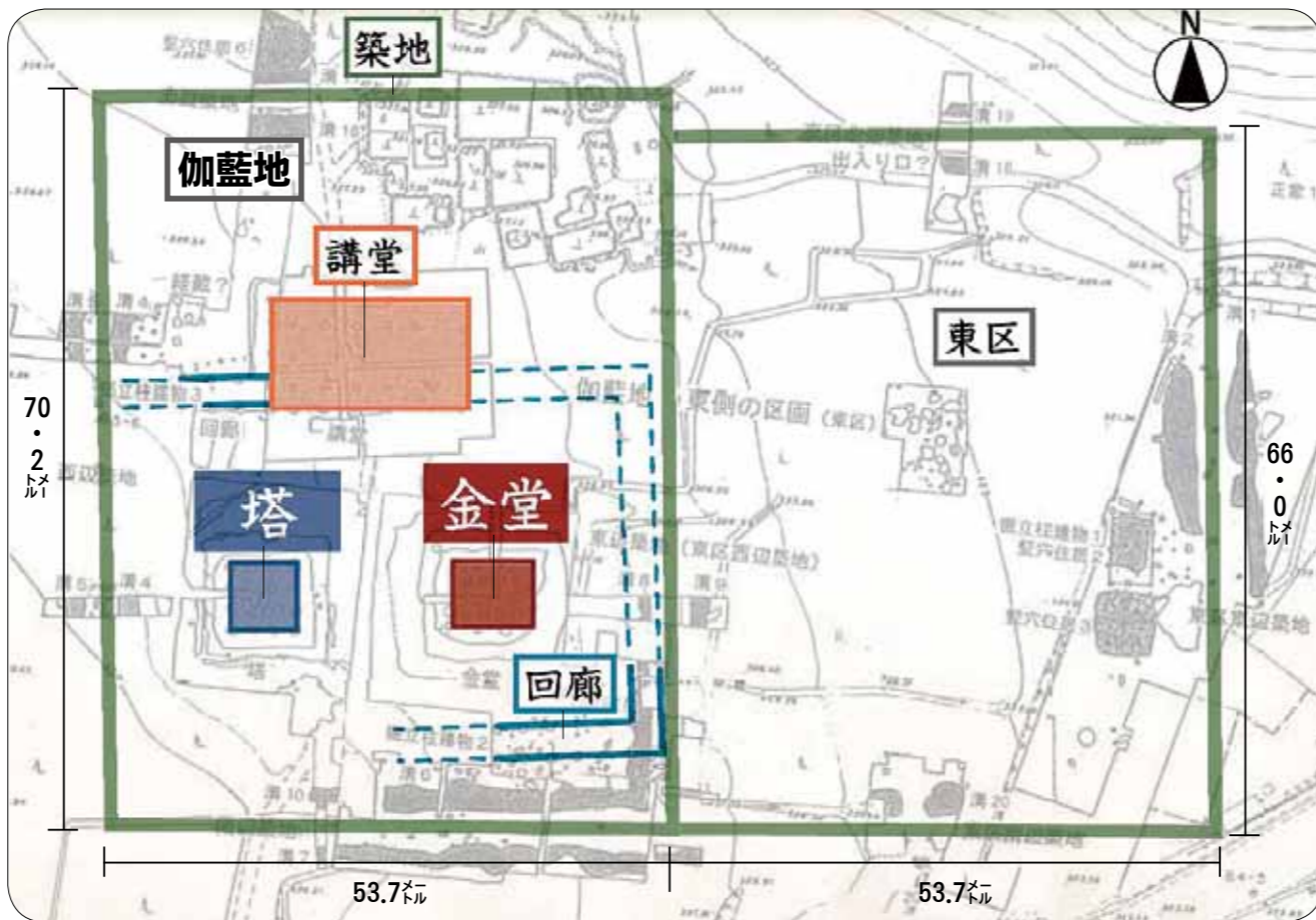
▲昭和5年に建てられた史跡の標柱

塔の先頭部分に達する心柱の礎石。花こう岩製の中央に心柱を支える円形の礎石が掘り込まれている。二つに割れていて、手前のものは元の位置から移動している



中央とのつながり示す

講堂と金堂から三彩陶器のつぼのかけらが各1個体分、東区の竪穴建物内では廃棄されたような状態で仏具の二彩浄瓶の一部などが出土しています。これらの奈良三彩は、官営工房で焼かれた最高級品で、地方の有力な豪族や寺院に与えられたものと考えられていて、正家廃寺の当時における重要性がうかがわれます。正家廃寺が造られた8世紀の初めは、律令制度に基づく地方の行政組織が整備される時期で、恵奈郡もこのころに設置された可能性が高いといわれています。



▲遺跡配置図



▲金堂(手前)と塔(奥)の基壇

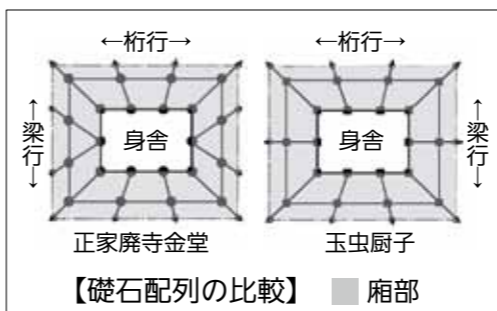
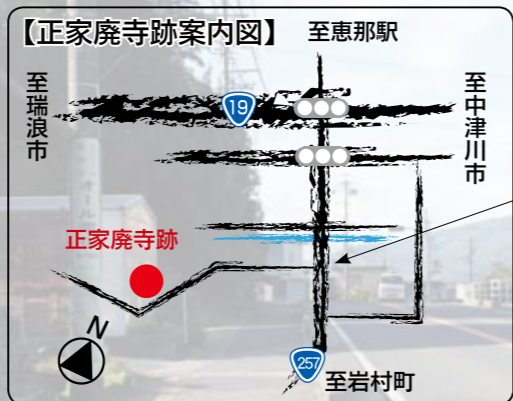
市内で初めて国史跡に

正家廃寺跡では、西側の区画を伽藍地、東側の区画を東区と呼びます。伽藍地は東西53・7、南北70・2。北側に講堂、東に金堂、西に塔を配置。築地ができる前に回廊があったことも分かっています。東区は、東西53・7、南北66。東区内では、掘立柱建物1棟と竪穴建物2棟を確認。鉄滓(鉄のかす)や鍛冶屋が使うふいご羽

口の出土から、鍛冶工房の存在が推定され、寺院の建設や維持管理に関わる施設があったと考えられています。正家廃寺跡は、丘陵の中央部に高塚状に塔と金堂の基壇が残っていて、古くから寺院跡として知られていました。昭和31年6月に県史跡に指定。昭和51年から55年にかけて行われた発掘調査では伽藍地の配置や規模を確定。三彩陶器が出土して注目されました。平成5年から10年までの発掘調査で、寺域の規模や主要な建造物の規模と構造などが把握された他、風鐸や鉄くぎなど大量の金属製品などの遺物が出土しました。奈良時代に造られた寺院跡が、付属施設を含めて良好な状態で保存されていることが判明。平成13年8月に、市内で初めて国史跡に指定されました。



▲奈良三彩。中央上は二彩浄瓶、手前右端は緑釉香炉。三彩は、緑、白(褐色)、黄の釉薬で彩られた陶器で、中国の唐三彩を見本にして奈良時代に作られたもの。全国でも出土例はわずか



▲本尊仏を安置した仏殿で現代の本堂に当たる金堂の跡

特異な礎石配置の金堂

金堂の大きさは、東西(桁行)7・5、南北(梁行)6。礎石の配置から、廂の柱が身舎の柱と直行せず放射状に配置されていたことが分かっています。このような建物は現存せず、発掘された遺構からも確認されていない全国で唯一の形式。法隆寺にある国宝の「玉虫厨子」の構造と共通点が多く、注目されています。



# 保存と展示が両立の整備

## 当時を知る貴重な遺跡

正家廃寺跡は、地方寺院の全体像を把握することのできる大変貴重な遺跡で、奈良時代から平安時代初期の古代恵奈郡の政治や社会、経済を知るための重要な遺跡です。

平成9年に奈良県の飛鳥池遺跡で発見された木簡によれば、677(天武6)年には、恵奈郡は存在していませんでした。8世紀前半に、東山道の整備が行われ、その一環として恵奈郡が立郡された可能性が高く、正家廃寺の建設も密接に関係するものではないかと考えられています。

正家廃寺跡の特色は、特異な金堂・希少性の高い風鐸や奈良三彩をはじめとする豊富な遺物、日本最古の床



▲竪穴建物跡最古の床板(写真の黒い部分)。平成6年に寺平遺跡の竪穴建物跡から8世紀の床板が出土。それまで10世紀後半の床板が日本最古だった通説を覆す発見となった

板がある竪穴建物が挙げられます。一番の特徴は、寺域全体が良好な状態で保全されていることです。

## 地域で守ってきた史跡

正家廃寺跡のある長島町正家地区は、重要な幹線の通る交通の要衝で、不断に開発されてきました。このような状況で、この史跡が良好な状態で保全されていたのは単なる偶然ではないと考えられます。

昭和5年には、史跡を示す標柱が建てられました。これ自体が正家廃寺跡の保護の歴史を示しています。平成19年には正家区有志により「正家寺平歴史の里整備構想研究会」が発足しました。ワークショップなどを通じて丘陵全体の活用策を立案。歴史ウォーキングや草刈りなどの活動を展開。平成24年には正家廃寺保存会が発足しました。この史跡は、地域の手で保全され続けています。

## 史跡の保存計画を策定

平成23年8月に正家廃寺跡調査整備委員会を設立し、平成24年5月に「史跡正家廃寺跡保存管理計画」を策定しました。この計画は、正家廃寺跡の特色と価値を明らかにし、そ



▲保存会が行う草刈り作業

## 整備計画に基づき保存

正家廃寺跡の遺構は、地下にあるものと基壇や礎石のように外に出ていないものがあります。保存と展示が両立する整備方法を検討して、地域との協働で包括的な保存管理を行っていきます。現状では、定期的な点検や草刈りなどの維持管理を行います。これまでの調査の成果を踏まえ、必要な場合はさらに調査を行い整備計画を策定し、適切な保存と管理を行っていきます。

今後の調査により、正家廃寺の全体像が明らかになる可能性がります。全体像が明らかになると、正家廃寺だけでなく古代寺院の解明につながるかと期待されています。

20年前から正家廃寺跡の調査に関わっています。昔から正家廃寺跡は有名です。金堂の礎石配置は、奈良県明日香村の山田寺と似ています。寺域全体の保存状態が良く、全国的な注目を集めています。

ことし敷地の公有化もできましたので、これからが楽しみです。今後、正家廃寺を造った人を解明することも必要です。東山道との関係や正家廃寺の全容が明らかになると面白いと思います。

## 奈良時代の本物見せる

本物を見せることが望ましく、付属で当時の歴史や古代史を学習できるようなものもあつたら、地元住民の自信や活性化につながっていくと思います。地域の活性化や自信、観光につながるように、目に見える形で整備することが望ましいと考えています。

建物の復元は、何十年もかけて調査や検討を行う必要があり、容易ではありません。史跡が奈良時代からこれだけ良い状態で残っているのは、地元の方々が大切にしてきたからで、全国的にも珍しく、とても貴重です。本物を大切にした整備を行ってほしいと思います。



独立行政法人国立文化財機構理事  
奈良文化財研究所長  
まつむらけいじ  
松村恵司氏

自然の中にある史跡は手を掛けなければやがて荒廃してしまう危険があります。そうならないためには、計画的に継続して整備や保存活動を行う必要があります。

市の宝といえる正家廃寺跡を市民の手で守ろうと、平成24年4月に保存会を設立しました。現在は、市内外の約360人が会員に登録しています。会員は、史跡を大切に保存しようという行政と力を合わせ、熱心に活動しています。



正家廃寺保存会  
にしのおなみ  
西尾直躬 会長

## 古代ロマンかき立てる

置、講演会の開催による啓発、視察などの研修、ウォーキングへの協賛で地域との交流や宣伝活動を行っています。

正家廃寺の全体像を早急に明らかにして、正家廃寺跡を市の象徴的な存在として保存し、古代のロマンをかき立てるような場所の一つに整備してほしいと思っています。正家廃寺は、正家地区の寺ではなく、恵奈郡の寺と認識していただき、みんなでこの史跡を守っていききたいです。

保存会では、市と協働で正家廃寺跡への案内看板の設置や年3回の区域周辺の草刈り、基壇の保護、回廊跡への目印の設

将来、整備された正家廃寺跡を訪れる方が、恵那の古代史に思いをはせるようになればうれしいです。



1996年(平8)	金堂跡の発掘、伽藍北側の調査(金堂の礎石配置を確定。講堂に取り付く回廊の一部や経蔵に相当する建物を検出)
1997年(平9)	回廊の検出。伽藍地東側で、築地で囲まれた区画された施設を検出
1998年(平10)	
2001年(平13)	国史跡に指定
2007年(平19)	正家寺平歴史の里整備構想研究会設立
2011年(平23)	正家廃寺跡調査整備委員会設立
2012年(平24)	史跡正家廃寺跡保存管理計画策定
2013年(平25)	史跡の公有地化完了
2013年(平25)	市による発掘調査を開始。現地調査は4年間で、調査箇所は、伽藍地南側と東区、伽藍地西側
2017年(平成29)	

8世紀前半(奈良時代)	正家廃寺建設着手
9世紀後半(平安時代)	主要伽藍の火災により廃絶
1930年(昭和5)	史跡を示す花こう岩製の標柱が建てられる
1956年(昭和31)	県史跡に指定
昭和40年代後半	『市史』編さんの資料収集の一環で本格的な調査
1976年(昭和51)	県指定史跡正家廃寺跡第1次調査
1976年(昭和51)	南山大学を中心とした調査団が範囲確認調査を実施(講堂の全面発掘と伽藍配置や規模の確定。三彩陶器の出土)
1992年(平成4)	寺平遺跡第1次発掘調査(遺跡東端の確認。二彩浄瓶の出土。鍛冶関連遺物の出土)
1993年(平成5)	第2次調査の開始(伽藍を区画する築地の検出。床板有する竪穴建物の検出)
1994年(平成6)	伽藍地南東コーナーの確認
1995年(平成7)	塔跡の発掘(火災による廃絶。風鐸の出土)

## 正家廃寺跡の歴史